

●総説

風土記の庭—島根県立古代出雲歴史博物館ランドスケープ—の設計プロセスにみられる物理的特性と文学的特性に関する省察

三谷 徹

千葉大学大学院園芸学研究科

A reflection on the physicality and narrative in the landscape design for Izumokuni-Fudoki Garden of Shimane Museum of Ancient Izumo

Toru Mitani

Graduate School of Horticulture, Chiba University

Landscape Design is the creation of outdoor space through the analysis and redevelopment of physical and cultural environment specifics in the region where the site located. In the design process, both specifics are to be interpreted to the 'physicality' and 'narrative' of space-design vocabularies. This essay aims at describing how the designer find out the way of that interpretation, reflecting the whole design process of Izumokuni-Fudoki Garden of Shimane Museum of Ancient Izumo. Not only simple response from the physical specifics to 'physicality' and from the cultural to 'narrative,' but it is also observed the narrative interpretation of physical environment and the physical way of cultural environment. Those complex interference are recognized through the detail design study of functional problems that the designer has to solve particular to the site itself.

【Keyword】ランドスケープ，デザイン，庭，出雲

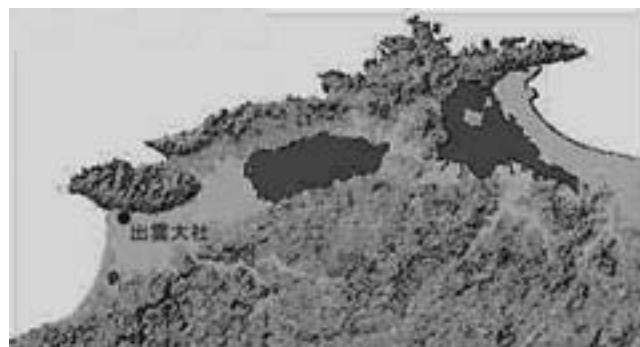
序 プロジェクト概要

島根県立古代出雲歴史博物館は、島根県出雲市（第1図）の出雲大社すぐ東の敷地に建設された、敷地面積5.6ha、建築床面積12,000m²弱の博物館と庭である。もともと松江市内にあった古代文化センターが所蔵していた歴史的資料を核とし、規模を拡大し建設されたものである。近年、神庭荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡、出雲大社の巨大柱跡など多くの遺跡発掘から得られた資料の博物館新設事業である。設計競技は2001年11月に行われ、建築家横文彦を代表とするわれわれの案が一等入選となる。その後2002年3月から9月の期間に基本計画、基本設計をまとめ、実施設計は2002年10月から2003年10月、そして建設は2003年12月に着工し2年4ヶ月を費やして2006年3月に竣工、オープンにこぎ着けた。

筆者は、その設計競技の段階から竣工までの5年間、ランドスケープの設計者として関わった。この総説ではその設計過程を振り返りつつ、特に空間デザインにおける文学性のあり方について著すものである。

1 庭の空間デザインと文学性

出雲の古代文化遺跡を中心とする博物館が出雲大社に隣接して建設されるという特殊性から（第2図）、設計では「出雲」という地域性という課題をさけて通るわけにはいかない。特に当地には郷土が誇りとする「出雲国風土記」という大文



第1図 島根半島の立地

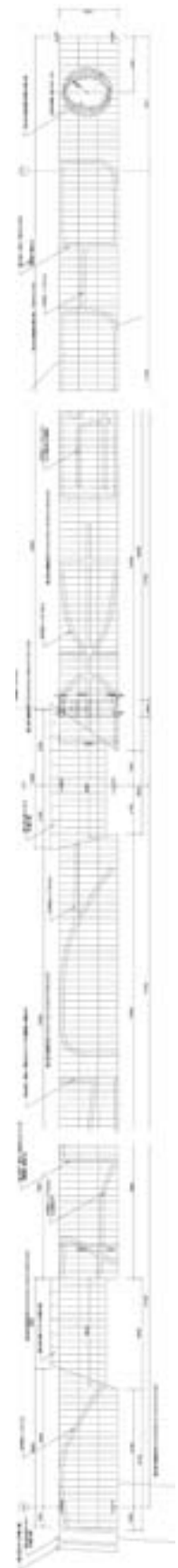


第2図 敷地配置図



北山に向かう園路には「国引詞章」の一節が刻まれている。福光石の舗装に來待石の分節が現われ照明を組み込んだベンチが据えられている。（撮影：吉田誠）

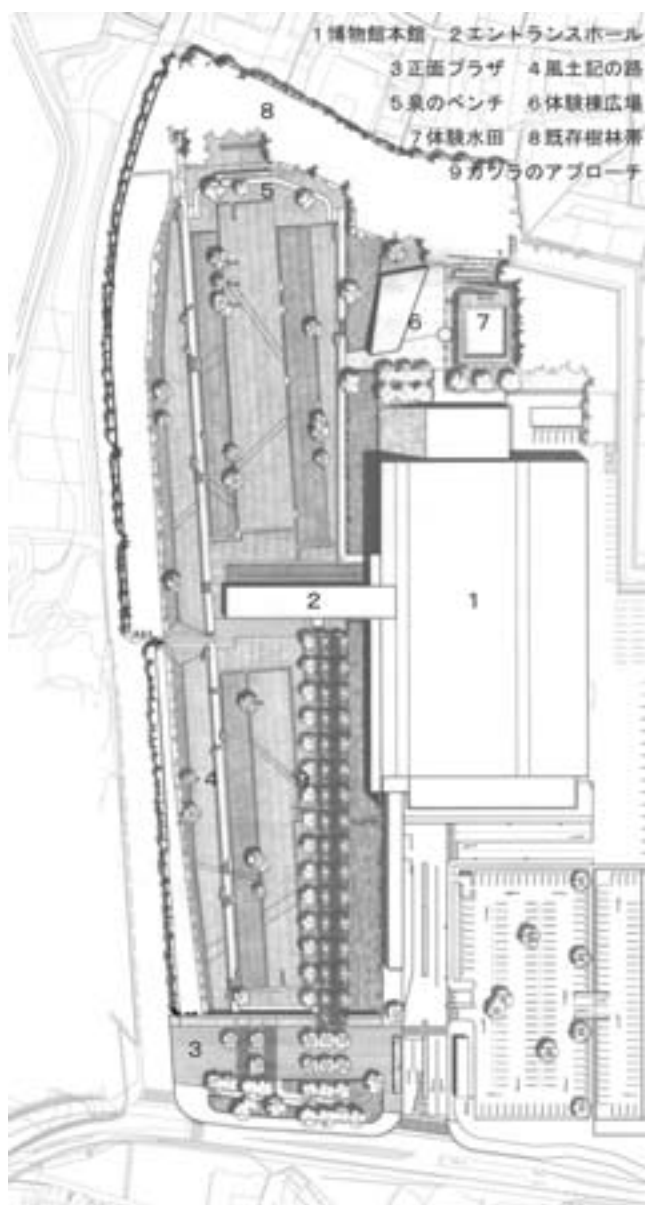
第3図 夕刻の風土記の路



第4図 風土記の
路部分平
面詳細図



第5図 風土記の路北端より博物館を見返す（撮影：吉田誠）



第6図 風土記の庭 平面図

学が存する。この課題に取り組むことは、自ずと、空間デザインにおける「文学性（ないしは文化的環境特性の表象）」に対する認識を明確化することを意味し、設計プロセスそのものがその考察の反復でもあった。

庭園における空間と文学性の関係は、建築におけるそれとは少々異なる。建築においては、機能を充足することそれ自体がデザイン行為であり、出発点ですでに物理上の課題に応える仕事が含まれている。ここで機能に関する再解釈がともなえば、その作業の中に建築の社会的役割や文化的表象、すなわち文学的意味が浮かび上がる。ところが庭園は、社会的に妥当性を与えられる誰にでも明確な機能というものを要求されていない。オープンスペースは文字通り、その使い勝手においてもオープンであり、何でもできる空間がオープンスペースとなる。庭園においても基本的には物理性をともなう明確なプログラムは投影されない。したがって物理的空間造形の追求は短絡的に文学性の追究となりやすく、空間構成の理由は外在する文学性（文化的特性）に帰結されてしまう。有名無名を問わず多くの庭園が、背景となる宗教や思想の表象として案内されているところは皆知るところである。庭園空間の身体的な審美性が、文学的背景と切り離されて論じられることは稀ですらある。

このジレンマを議論のテーブルに載せた一人に、George Hargreavesがいる。彼は彼自身のめざす環境デザインの‘open composition’を実現するため、敷地の特性をphysical environment（物理的環境）とnarrative environment（文化的環境）に分類して設計する視点を提示した。前者は地勢や気象などの物理的自然現象に由来する環境因子であり、後者はそれらに呼応して育まれてきた風土、伝承といった環境因子とする。そしてデザイナーはこれを二極—空間のphysicality（身体性）とnarrative（叙述性）—として操作することによって新しい空間を生み出しようとするのである。特に彼が目指すのは、「叙述的要素が物質的となり、物質的要素が叙述性を表現するような合流地点」[1]であり、そこではnarrativeとphysicalの置換が試みられる。

ここでは「風土記の庭」の設計過程をふりかえりつつ、空間デザインにおいて叙述的（narrative）な文脈と身体的（physical）な空間の形がどのように交錯し設計として定着していったのかを記述してみたい。

2 配置計画に織り込まれた風景の祖型

本計画案は、まず建築を「脇にどける」ことから発想されている。隣接する出雲大社に配慮すると、博物館の高さは押さえられ逆に建蔽面積は大きくなる。この建蔽の大きさからくる支配感を解決するため、建築ヴォリュームを敷地東側に移動させる案が検討されたのである（第6図）。

来訪者を建築ファサードではなく、敷地北側に広がる山並みにより迎えるという空間構成は、建築に与えられた最も特徴的な立面が、正面南側ではなくアプローチにそった側面にあるという特異な構成にも現れている。建築家が「出雲古来のたたみ製鉄に因んで」と述べる〔2〕、高さ9m長さ120mの耐候性鋼の壁面である。この長大な赤錆の壁面が敷地背後の山並みを枠取り浮き立たせる。

南から北山山系に向かい、手前に広々とした平地を眺める在り方自体が、出雲の地勢を反映する風景構成の祖型である。今は農地として開拓された出雲平野は、内陸山系と、有史以前には沖合の島地形であったと考えられる北山山系の間の沖積平野上に形成された半島状の開墾地であり（第1図）、日本海からの季節風から守られていた。そうした物理的環境に基盤をおく出雲の暮らしは、常に北山に抱かれた風景の中にあつたのであり、そこから生まれたであろう北山への畏敬が、出雲大社の位置づけにうかがわれる。そうした地域の物理的環境特性、ひいては風景の祖型をこの配置計画は再現している。

この配置計画と並行して、敷地境界を取り囲む針葉樹系常緑樹帯の保全も目指された（第6図の8）。目的のひとつは、周辺の雑然とした景観を抑制することであるが、それ以上に、密植された針葉樹帯が、出雲平野に特徴的な屋敷林の構成と同じであったからである。それは「築地松」の名でよく知られており、広々とした水田風景の中に、屋敷の北側と西側をL字型に囲む松の大刈り込みが点在している。

空地の外周植栽とはいえ、敷地の北と西を囲い込む形態はまさに同じ様式であり、結果として博物館と庭、そして緑地の関係は、そのまま農家とニワ、それを囲い込む築地松の関係と相似となる。そのスケールの違いから当計画が築地松を

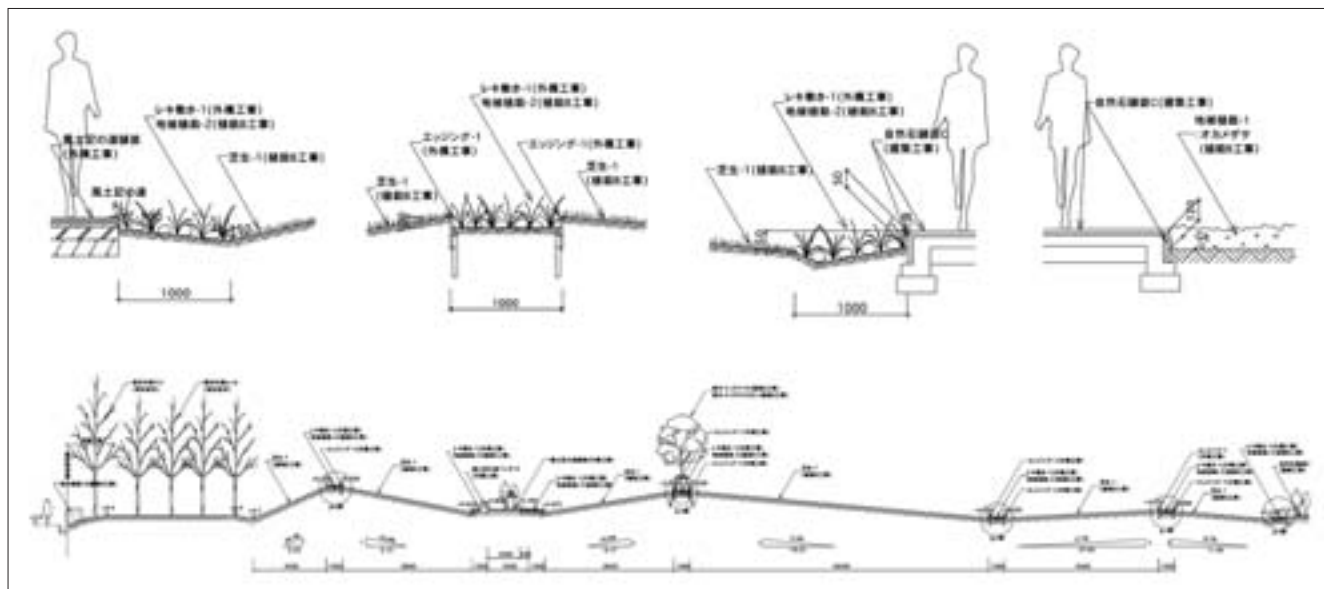
連想させるかとなると疑わしい。しかし、敷地に対し南入りであるということ、そして左手に密実な植栽帯を感じながら北山に向かう空間体験は同じである。この型を守ることは、北西からの卓越風から身を守る農家の工夫を、単に技術のかたちや農耕文化史として複写するのではなく、身体的体験をともなった風景構成として継承することになる。すなわち地域文化特性の庭園の身体的空間言語への置換ととらえることができるのである。

3 細部に隠し込む文学—文化的環境特性の形態言語化—

以上の配置計画がもたらす風景構成は、基本計画時から空間の骨格として明確に認識されていたところである。

その後実施設計段階に入り、県の博物館事業推進の担当者との打ち合わせが始まるのであるが、ここで「出雲国風土記」のさらなる明確な反映が求められることとなった。特に、古代文化センターの職員の方々は、島根の文化と風景への愛着が強く、われわれ設計者は何日かをかけて彼らの案内により「出雲国風土記」に由来するとされる遺跡、名勝などをめぐることになった。しかしこうした具体的な由来を空間デザインに結びつけることは、庭をテーマパーク化してしまう危険性をはらみ容易ではない。一方、博物館側からすれば、来館者への案内として、この木はこれこれの由来、この形はなになにを象徴するものといった方が容易であり、時には来館者も満足することが多い。設計者はこの中で、文学性と身体的空間デザインの置換を目論まねばならない。

このジレンマを解くために、風土記に基づくわかりやすい文学（由来の叙述的伝達）を、身体性を与える空間構成そのものの形ではなく、その要素のディテールに隠し込むという



第7図 庭園東西断面図と〈隙間〉部詳細断面図

方法をとった。そうすることで、あくまでも北山を主役とする全体の空間構成スタディーから切り離れたところで、並列的に叙述性を工夫できると考えたからである。

3-1 地表造形のディテールがもたらした叙述性

この庭の主たる要素は、南北方向を軸としわずかに折れ曲がる折面構成の地表デザインである。これは、北山に対して大きく空けられた空虚をさらに強靱なものとするべく考えだされた形態言語である。

地表をおよそ巾15m、長さ100mほどの矩形の芝生面とし勾配2.7%から19.4%の間で変化させた（第7図下）。この時重要になるのが、地表の折り線となる谷線と山線のディテール処理である。構成要素の見切りは常にデザインの肝要であるが、この風土記の庭でも、隣接する芝面と芝面の間に「隙間」を与えて見切り、この隙間を丁寧に扱うことで地表に表情を与えた。傾けられた各々の芝面のエッジは、12mm厚の見切り板で支えられ、50mmの段差を持つ（第7図上）。この立ち上がり50mmは南北に300m東西に80mという全体のスケールからみれば非常に小さなものであるが、これが朝に夕に陰影をつくり出し地表にobjectivity(物性)を与え、緊張感をつくり出す。

この緊張感ある地表造形こそが出発点であったが、実施設計の中でこのディテールに地域の物理的環境を叙述的に映し込む可能性が認識されていった

エッジのレベル処理が、ふたつの植生構成のきっかけとなり、これが出雲らしいテクスチュアを地表に与えることとなったのである。矩形の内部は一般的な芝生管理とし、その

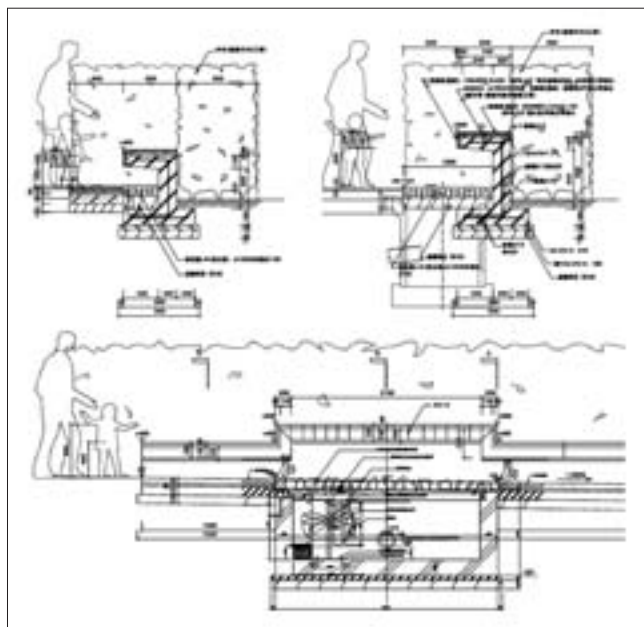
隙間は自生してくる草本類の粗放管理という段階付けをしたため、テクスチュアの荒い地被植生の上に抽象的な芝面が浮いている関係が視覚化されたのである。雨水排水経路となる「隙間」の植生は湿地性草本類であり、そのかたちは新しい地面の割れ目から顔をのぞかせた旧植生とも見える。このありようは、宍道湖、中海に流れ込む幾筋かの水系に湿地性植生が繁茂し、その間に条理地割制が整然と区画されている出雲平地の在り方に似ている。まずは抽象的な身体性を求めた地表造形の中にも、このようにして、地域の物理的環境特性との呼応、庭園の叙述性を位置づける可能性が見えたのである。

3-2 植栽計画に見いだされた文学性

「隙間」は、出雲国風土記の文学性をさらに具体的に反映するディテールとして利用されている。施工現場に入ってから植生試験を経て、「隙間」に適合する草本類の中にも、風土記に由来する植物が含まれることがわかってきたのである。そこで矩形芝生面の「隙間」の谷部分にそれらを植えることとなった。第1表に示すのは、植生実験からこの敷地に適合した種と出雲国風土記の植物の対応である。

一方、「隙間」の山部分にも文学的表象を行う植栽が可能であることが実施設計段階で認識されてきた。敷地はもともと地下水位が高く貧困な土壌環境であった。宅盤造成のために県内土木工事での発生土を持ち込み地盤強化したためであり、庭園工事に入っても1mも掘れば地下水位が顔を出し、長谷川式透水試験では24時間後にまだ残水の認められるという好ましくない状態であった。

そこで庭園内部の高木植栽は、レベルの高い折面構成の山線部に限定し、植穴下部に透水管を内包した排水層を敷設する余裕をとった。このささやかな技術的配慮の中で高木植栽に文学性が与えられることとなった。庭園内のこの高木植栽



第8図 泉のベンチと発音装置 断面詳細図



第9図 泉のベンチと北山（撮影：吉田誠）

第1表 出雲国風土記に由来する地被草本類の植生試験結果

設計時提案	新しい設計候補	風土記 植物	生育状況、可能性				流通性
			施工前 試験	現地 状況	別件 実績	造園会 社予想	
ベニセタム			○	○			○
ウラハグサ			○	×			○
カンスゲ		○	○	○			○
フイリヤブラン			○	○			○
オトギリソウ		○	×				○
ハナミューガ		○	○	×			○
サクラソウ			○	×			○
ゴマノハグサ		○	×				○
ユキノシタ			○	×			○
オタフクナンテン			○	○			○
サワギキョウ		○	○	○			○
	ノイバラ				○	○	○
	コマユミ				○	○	
	ノアザミ	○			○	○	○
	ヤマアザミ					○	
	チゴユリ				○		
	シラヤマギク				○	○	
	トクサ					○	○
	ツユクサ					○	
	オシロイバナ					○	
	サネカズラ	○				○	○
	ムラサキ	○					
	ナルコユリ	○					
	クロユリ	○					
	ササユリ	○					
	コオニユリ	○					○
	シラン	○				○	
	ヨモギ	○					○
	リンドウ	○					
	オドリコソウ	○				○	
	カワラナデシコ	○					○
	ワレモコウ	○				○	○
	テイカカズラ	○				○	○
	コマツナギ					○	
	オキナグサ					○	

のありかたが、「意字の杜（おうのもり）」のありかたと相似であることに気づいたのである。「意字の杜」とは出雲平野に点在する小丘にタブ、シイ、エノキ、ヤマモモなどが密生する一叢であり、小祠が奉られていることもある。いずれも高水位地盤と強い寒風に耐えた結果の植生形態である。

出雲国風土記によると、八束水臣津野命（やつかみずおみづのみこと）が国引きを終えた時にその杖をついた場所と伝承している。出雲国風土記、意字郡〈国引詞章〉に「『今は国は引き訖へつ』と詔りたまひて意字の杜に御杖衝き立てて『意恵』と詔りたまひき。故れ意字と云ふ。」とある〔3〕。

「意字の杜」の風景の中でのありようを観察していると、それは湿原性平地の中に自生したこれらの樹木群を、条里制開拓の際に残し祀ったものと推測され、ここに風土形成史において物理的環境が文学に翻訳される過程をみることができる。

庭園において高水位をきらい小高い部分に樹木を配する形態は、物理的環境の面においてまさに「意字の杜」と相似である。そこで、その植栽ディテールに意匠をこらした。あえてタブ、シイを中心とし、その植元はちょうど芝生の矩形

が割れて植生が顔をのぞかせたように、すなわち農耕地の中に取り残された「意字の杜」のように植鉢のかたちを定め、文学的表情を与えることとした。

3-3 石舗装のディテール—風土記の路—

「風土記の路」の形態は、基本設計の段階で発案されたものである。庭園の西側に明快な境界性を与え、北山への距離を感じさせるため、巾2.5mの園路を敷地南端から北端まで283.2mにわたって直線として引いたものである（第6図の4）。石材は地元産である福光石であり、その中にやはり島根県産の来待石によるベンチを組み込んでいる。南側プラザから庭園を見下ろすと、右に博物館の耐候性鋼板の赤、左に福光石の園路の白さを控え、山景がフレーミングされることとなる。

空間のphyscality（身体性）としてはこれで十分と考えたが、博物館側からは庭園全体にさらなるnarrative（叙述性）な文学性を期待された。そこで最も直接的に文学性を表象するため、「国引詞章」の一部を園路全長にわたって刻印し、文字そのものを庭園要素として持ち込んだ。出雲国風土記、意字郡〈国引詞章〉の一節、

「波多須々支穂振り別けて三身の綱打ち掛けて霜黒葛闇や闇やに河船の毛曾呂毛曾呂に国来国来と引き来縫へる国は去豆の折絶よりして八穂尔支豆支の御埼なり」の一部である〔4〕。

この際の腐心は、直接的な叙述が物理的な形態として顕在化しないようにすることである。833mm×300mmの福光石平板を敷き並べた園路上にブラスト加工で彫り込まれる文字は、一文字およそ2.5m×10mにまで拡大されており、園路上の散策者にはそれと意識されない（第4図）。ちょうどエントランスホールの3階展望フロアから見下ろすあたりで文字と認識できる程度である。加えて、彫り込み厚も3mmとわずかなものである。このため文字の存在が視覚化されるのは早朝あるいは夕刻に日が傾いた時の陰影によってのみである。また竣工後の観察によると、降雨時あるいは雨後の濡れ具合によって文字が浮き出ること気づいた。ちょうど雨天曇天の多い出雲に適合した、文字の地上絵といったところである（第3図）。

この叙述の存在は結局、庭園を訪れた時の天候、時間によって現れたり現れなかったりするであろう。しかしそれだけでよいと考える。そのようにして叙述的効果が身体的な空間言語の背後に隠れ、庭の意味は、来訪者とその時々との出会いにより発見されるものとなるからである。

3-4 不可視のディテール—水音の景—

さらに隠し込まれたディテールとして、水音の工夫がある。滝、流れの類いではなく、排水施設の一部に手を加えた足下からの水音である。出雲がいにしえには湿地平原であったこと、今日なお伏流水の豊かな立地の叙述につながると思論んだものである。

風土記の路を北端まで歩ききると、道自体は檜林の中に消えてゆき、経路は東へ折れる。そこにヒイラギモクセイの刈り込みで囲い込んだ赤御影のベンチを据えた。ここにすわるとちょうど北庭の広がりを通して博物館の赤い立面とガラスのエントランスホールを見返すこととなる（第5図）。このベンチには小さな噴泉があり、その排水を用いて足下から落雫の響きが聞こえる仕掛けをつくったのである（第9図）。

出雲を囲む北山山系の麓には「真名井の泉」の名をもつ湧水が複数あり、この敷地のすぐ北側にもそのひとつがある。樹齢の高い巨木にしめ縄をまわすなどして泉を祀り、その謂われを説く。こうした謂われも、出雲という土地の物理的環境を長い年月の中で人々が文化的所作へ解釈した例と考えられる。「風土記の庭」に施したベンチの小さな噴泉は水景施設ではあるが、そうした人々の湧水への思い入れを反映したものである。

噴泉の下には通常より大きい内径2,100×800×800mmの枡を入れ落雫の落下距離を取り、かつ反響に適した空間を確保している。加えてこの空間をもちいて、添水の仕掛けを応用した発音装置を設置してある（第8図）。5分ほどの間においてこれが回転し金属の発音管を打ち鳴らすので、ここにしばらく座る人は耳慣れぬ音を足下から聞くことになるであろう。

水音の仕掛けは、思いがけない副次的効果も産んでいる。発音装置の据えられた枡は敷地全体の排水系統につながれているため、枡の中で反響した添水の音が排水管を伝わり、芝生広場の「隙間」から微かに聞こえてくることに竣工後気がついた。地表ディテールの「隙間」の谷部は排水の合理的系統を解くものであったが、地中の水の仕掛けの音がわずかながら漏れてくることは、意図せぬ文学性を与えてくれた。敷地から発生した巨礫をこの「隙間」に並べて添景としたところ、修学旅行の学生などがお昼を広げる格好のベンチとして座るので、彼らはもしかしたらこの微かな音を耳にしているかも知れない。

結 空間の身体性（physicality）と叙述性（narrative）の 関 関

以上、全体計画およびディテール意匠のプロセスに現われた身体性と叙述性の関係を記述した。

顧みれば、設計プロセスでは地域の物理的および文化的環境特性と、庭園空間に与えられる身体性と叙述性という4つの間に相関が繰り返されていることが認められる。地域の物理的環境が庭園空間の身体性へ、文化的環境が叙述性に翻訳されるという単純な図式ではない。計画段階における建築配置や庭園の地割りにおいては、地形がもたらす風景の構成を映し込むなど、地域の物理的環境特性を庭園の身体的空間言語とする単純な関係が支配的である。

しかしながら、実施設計で様々な条件を現実的に解決する段階にはいると、物理的な側面と文化的側面の交錯をつくりだすきっかけが現れる。

地表のデザインにみる「隙間」の意匠では、デザイン言語と文化的特性の対応は、設計当初は全く意識されていない。折面構成は、何より建築ファサードに匹敵する物性を地表に与えるべく生まれた身体的形態言語であり、これが次に排水勾配と排水系統の合理化という機能を目指した。しかしそのディテール処理をデザインしている中に、地域の文化的環境特性の表象が植生傾向として認識されたものである。

高木植栽も同様に、高水位という敷地条件に対応した実施設計の段階になってからの技術的解決が、出雲平地の立地特性と出雲国風土記の記述の呼応を表象するものとしてとらえ直されることとなった。

一方風土記の路は、基本設計当初から主たる身体的空間要素として位置づけられていたものであり、そこに事業主から文学的役割を求められ、直接的に叙述性を与えたものである。しかしその叙述的表現が、日照や天候といった敷地の物理的環境特性を顕在化するきっかけを庭園に与えている。すなわち身体的言語に叙述性を与えるだけでなく、叙述的言語から敷地の物理的環境を身体性として位置づける効果も生まれたことになる。加えて、島根半島の地勢形成史が国引詞章として語られた、地域の物理的環境の文化的環境への置換をテーマとする可能性を見いだすことができた。

ここで特記しておきたいのは、そうした相互置換が、デザインを敷地に実現させるための技術的解決、機能的解決といった現実的設計検討を通して顕在化した点である。そうでなければ、敷地の物理的環境特性が庭園の身体性へ、文化的環境特性が庭園の叙述性へと単純に置換されるだけであり、至極平板な庭ができてしまったであろう。このプロセスは、敷地と直に関わることからデザインが成熟するという基本の再認識と言いかえることもできる。

参考文献

- [1] Hargreaves, George, Mitani, Toru: 'Development of the Open Composition Technique,' Space Design, Kajima Institute Publishing, 1998, 62-63)

- [2] 福永知義 (2006): 新建築, 第82巻7号, 79)
[3] 新編日本古典文学全集 5 風土記, 小学館, 1997, 139
[4] 同上, 135

プロジェクトデータ

名称 島根県立古代出雲歴史博物館
所在地 島根県出雲市大社町杵築東99-4/主要用途 博物館
規模 敷地面積56,492㎡, 建築延床面積11,855㎡
敷地条件 地域地区 第二種住居地域 都市計画区域内
工程 基本, 実施設計期間 2002年3月~2003年10月
施工期間 2003年12月~2006年3月
工事費 総工費 約68億円

設計: **建築:** 榎総合計画事務所/榎文彦 福永知義 近藤良樹
池田偉佐雄 蜂谷俊雄 矢野大輔 (元所員) 寺本建築 (都市
研究所) **構造:** 花輪建築構造設計事務所/花輪紀昭 滝沢伸
設備: 総合設備計画/遠藤二夫 若松宏 千田信義 長田秀樹
(元所員) **ランドスケープ:** 三谷徹 (千葉大学) オンサイト
計画設計事務所/戸田知佐 金光弘志 (元所員) 丹部一隆
インテリア: 藤江和子アトリエ/藤江和子 豊田恵美子 **サイ
ン:** キジウロウ・ヤハギ/矢萩喜從郎
施工: **建築:** 大林組・中筋組・岩成工業特別共同企業体 **ラン
ドスケープ:** 中筋組・岩成工業特別共同企業体 **植栽:** 出雲土
建 福島造園 池田造園

(受付: 2008年11月28日 受理: 2008年12月18日)